

第Ⅲ部 調査結果の分析

第1章 犯罪被害不安とリスク知覚

本調査では、人々の犯罪に対する意識をさまざまな質問項目を通じて尋ねている。問3では自分自身が犯罪被害にあうことに対する不安（自分自身の被害不安）を、問4では同居の家族が犯罪被害にあうことに対する不安（家族の被害不安）をそれぞれ尋ねている。問6では、犯罪被害の種類別に、その種類の被害にあうことに対する不安（被害不安）を尋ねている。問7では、同じく犯罪被害の種類別に、その種類の被害に巻き込まれる確率の見積もり（リスク知覚）を尋ねている。

犯罪不安研究では、被害不安とリスク知覚とを別々に測ること、また、罪種別に複数の測定尺度を用いて測ることが必要だといわれている（Warr,2000）。本調査はそのいずれも満たした充実した調査だといえる。また、3年前の2004年に同内容の調査を行っており、人々の意識がどう変わったかを検討できるのも本調査の強みである。

以下、各質問項目について結果を述べる。

1. 被害不安を感じる頻度

問3では自分自身が犯罪被害にあう不安を感じる頻度、問4では同居の家族が犯罪被害にあう不安を感じる頻度をそれぞれ4件法（よくある、たまにある、ほとんどない、全くない）で尋ねている。その結果を図Ⅲ-1-1に示す。

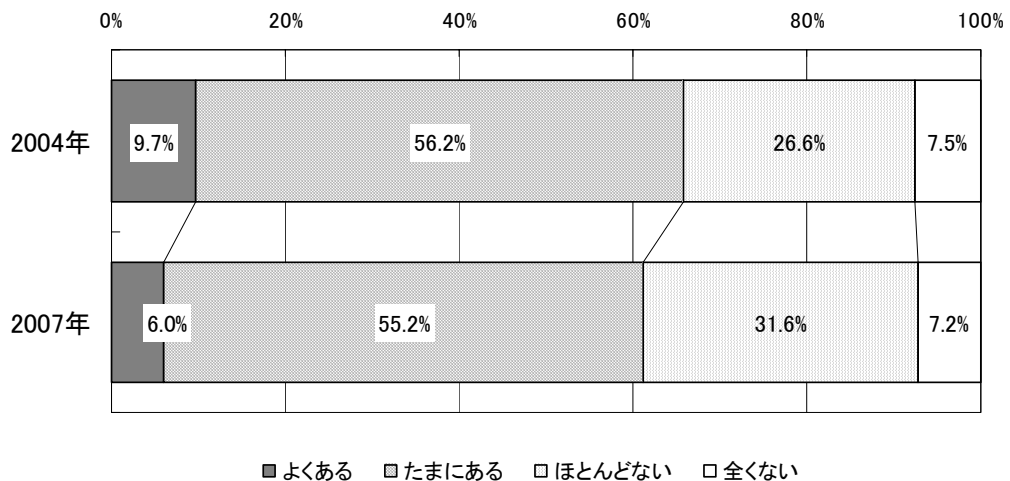
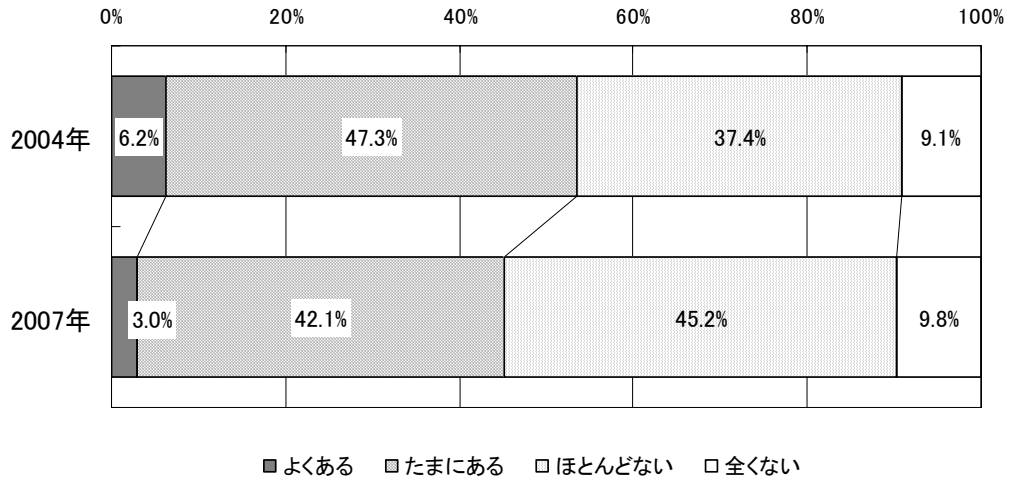
自分自身の犯罪被害への不安を感じる頻度は「よくある」が3.0%、「たまにある」が42.1%、「ほとんどない」が45.2%、「全くない」が9.8%だった。前回調査と今回調査とで各回答に対する割合に違いがあるかどうかをマン・ホイットニーのU検定により検定したところ、有意な違いが見られた（ $U=1425924$, $Z=-5.193$, $p<0.01$ ）。「よくある」「たまにある」の回答者の割合が減る一方で、「ほとんどない」「全くない」の回答者の割合が増加していた。

同居家族の犯罪被害への不安を感じる頻度は「よくある」が6.0%、「たまにある」が55.2%、「ほとんどない」が31.6%、「全くない」が7.2%だった。マン・ホイットニーのU検定によると前回調査とは統計的に有意な違いが見られた（ $U=1367142$, $Z=-3.483$, $p<0.01$ ）。前回調査に比べて「よくある」の回答者が減り、「ほとんどない」の回答者が増えていた。

2. 罪種別の被害不安とリスク知覚

本調査では、問5で罪種別の被害不安（自分や家族が当該犯罪に遭う心配の程度）、問6では同じく罪種別のリスク知覚（向こう1年間に自分や家族が当該犯罪にあう確率の主観

図Ⅲ－１－１ 被害不安を感じる頻度(上段:自分自身、下段:同居家族)



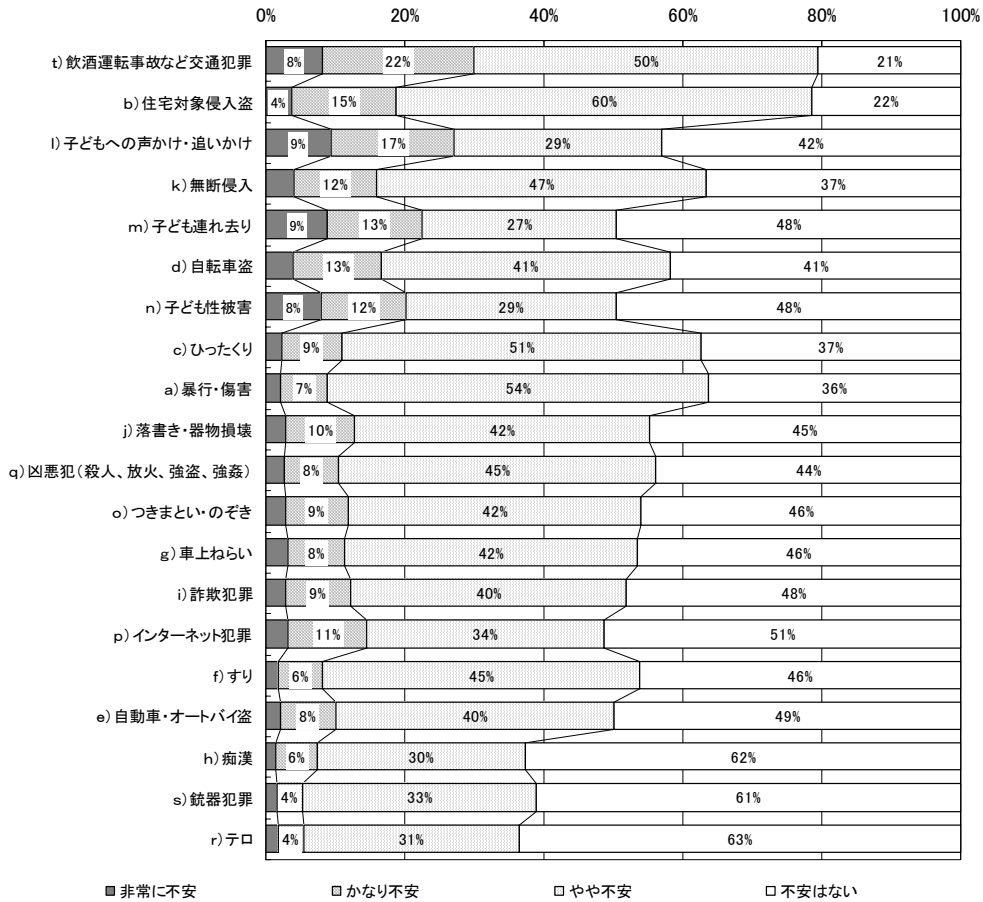
的見積もり)を尋ねている。いずれも4件法となっている。

図Ⅲ－１－２は被害不安の回答状況を示している。各罪種は後述する得点化の結果得られた平均値の高い順に並んでいる。すなわち、交通犯罪、住宅対象侵入盗、子どもへの声かけ・追いかかけ、無断侵入といった罪種で被害不安は大きく、自動車・オートバイ盗、痴漢、銃器犯罪、テロといった罪種では不安は小さい。

図Ⅲ－１－３は被害リスク知覚の回答状況を示している。交通犯罪、住宅対象侵入盗、無断侵入、ひったくり、自転車盗といった罪種は被害にあう可能性が高いと思われており、インターネット犯罪、痴漢、銃器犯罪、テロは被害にあう可能性が低いと思われていた。

被害不安について前回調査との比較をしたところ、有意な違いが検出されたのは住宅対

図Ⅲ－１－２ 罪種別の被害不安

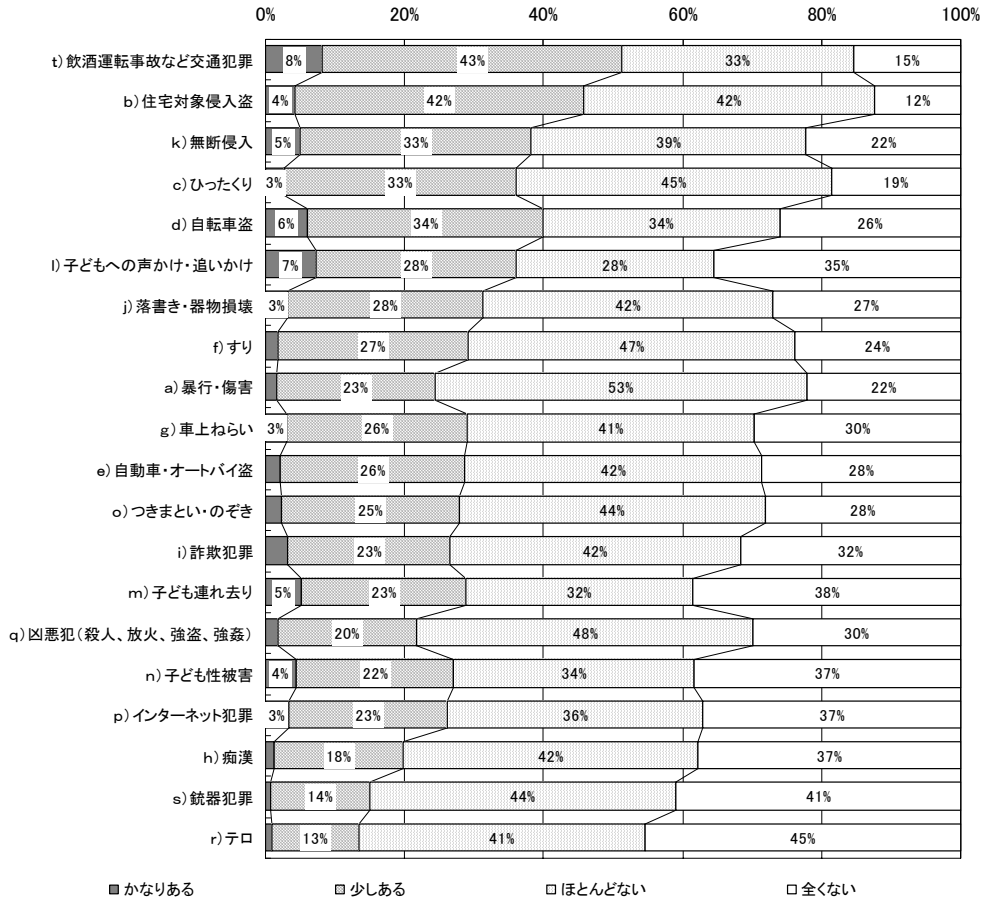


象侵入盗 (U=1443578.5, Z=-3.38, p<0.01)、ひったくり (U=1440528, Z=-2.03, p<0.05)、自動車・オートバイ盗 (U=1400803.5, Z=-2.21, p<0.05)、すり (U=1419594, Z=-2.39, p<0.05)、詐欺犯罪 (U=1293931.5, Z=-7.62, p<0.01)、インターネット犯罪 (U=1421208, Z=-2.11, p<0.05)、テロ (U=1373842.5, Z=-4.53, p<0.01) だった。

一方、リスク知覚に関して前回調査との有意差がみられたのは、住宅対象侵入盗 (U=1443579, Z=-3.38, p<0.05)、自転車盗 (U=1431119, Z=-2.15, p<0.05)、自動車・オートバイ盗 (U=1414729, Z=-2.37, p<0.05)、車上ねらい (U=1413604.5, Z=-2.253, p<0.05)、詐欺犯罪 (U=1294708, Z=-7.78, p<0.01)、落書き・器物損壊 (U=1440975.5, Z=-2.00, p<0.05)、テロ (U=1377577.5, Z=-4.31, p<0.01) だった。

以上を総合すると、前回調査からの比較でリスク知覚と犯罪不安がともに減少したのが住宅対象侵入盗、自動車・オートバイ盗、詐欺犯罪、テロの4種類、リスク知覚が減少したが被害不安が変化しなかったのが自転車盗、車上ねらい、落書き・器物損壊の3種類、リスク知覚は変化しなかったが犯罪不安のみ減少したのがひったくり、すり、インターネット犯罪の3種類となる。

図Ⅲ－１－３ 罪種別のリスク認知



3. 得点化による分析

本調査では被害不安を「非常に不安」から「不安はない」、リスク知覚を「かなりある」から「まったくない」の4段階でそれぞれ尋ねている。これらの尺度は順序尺度と呼ばれ、一般には前節で示したような「非常に不安」と回答した者の割合が何%といった分析が行われる。しかし、分析結果が煩雑になるため、以下のような手続きを経て簡便な得点化を図った。

被害不安については、問5のa)～u)の設問の回答をもとに、「非常に不安に」3点、「かなり不安」に2点、「やや不安」に1点、「不安はない」に0点をあたえた。リスク知覚については、「かなりある」に3点、「少しある」に2点、「ほとんどない」に1点、「全くない」に0点をあたえた。この得点化の方法は、質問紙上の数字の並び方とは逆になっているが、不安やリスク知覚の程度が上がるにつれて数字が大きくなった方が直観的な理解

が可能になるためこの方法を用いた。

また、各回答者の被害不安とリスク知覚を定量的に扱うため、問5、問6の合計得点を算出した。各項目の信頼性係数（クロンバックの α ）は被害不安で.92、リスク知覚で.95と高く、合計得点の信頼性が示された。

(1)リスク知覚と被害不安の関係

図Ⅲ－1－4は、罪種ごとに計算した被害不安・リスク知覚の平均値の対応関係を男女別に示している。横軸がリスク知覚を、縦軸は被害不安を示している。散布図上では、右に行けばいくほどリスク知覚が高く、左に行けば行くほどリスク知覚は低い。また、上に行けば行くほど被害不安が高く、下に行けば行くほど被害不安は低い。

男性・女性ともに各罪種のリスク知覚平均値と被害不安平均値との間には正の相関関係がみられた（男性 $r=.895$, $p<0.01$ 女性 $r=.844$, $p<0.01$ ）。すなわち、リスク知覚が強い罪種に対する被害不安は大きいという関係である。

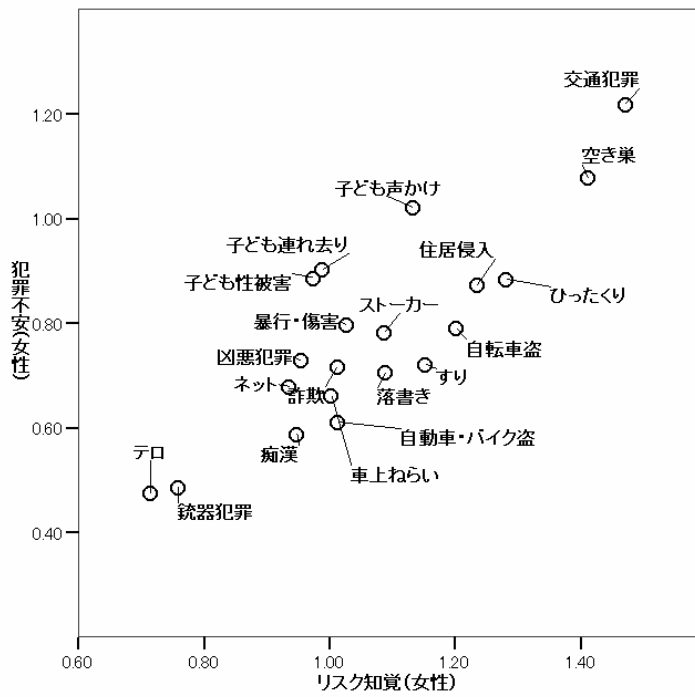
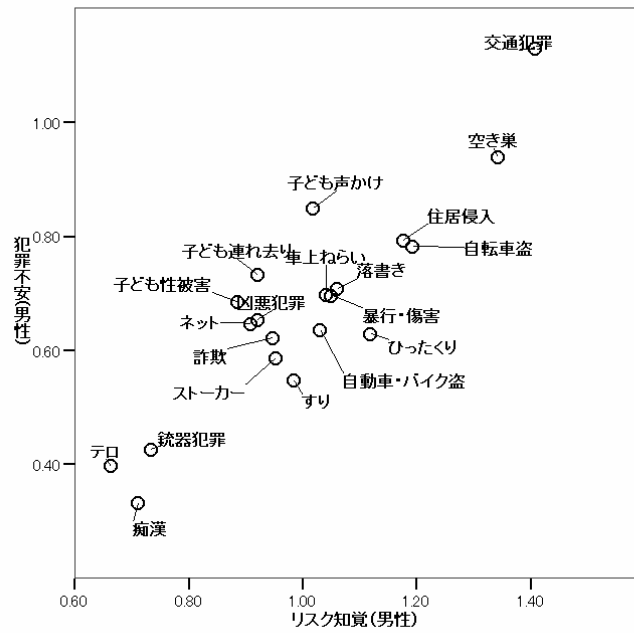
今回新規に加わった、「t）飲酒運転による交通事故、ひき逃げなどの悪質・危険な交通法令違反の被害」（交通犯罪）は、リスク知覚、被害不安ともに全罪種中最も高かった。逆に、「s）銃器を使用した犯罪の被害」（銃器犯罪）はリスク知覚、被害不安ともにテロなどに次いで低かった。

また、今回調査では、子どもの犯罪被害について、「不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする」「連れ去られる」「性的な被害」の3つについて尋ねている。これらの項目は男女ともに散布図の左上に位置している。すなわち、リスク知覚に比べて被害不安が大きい罪種となる。

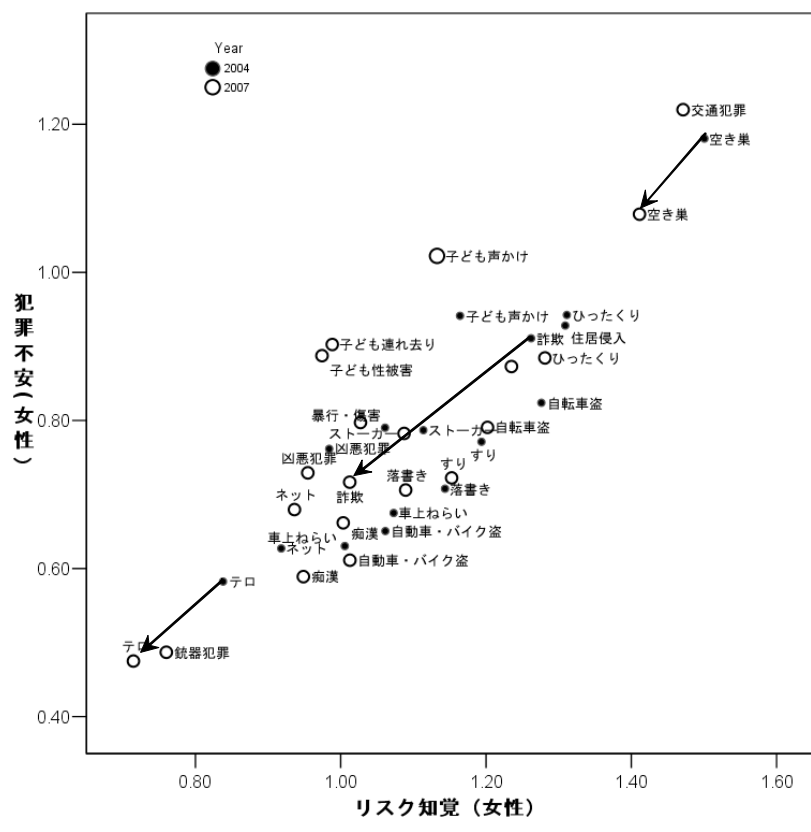
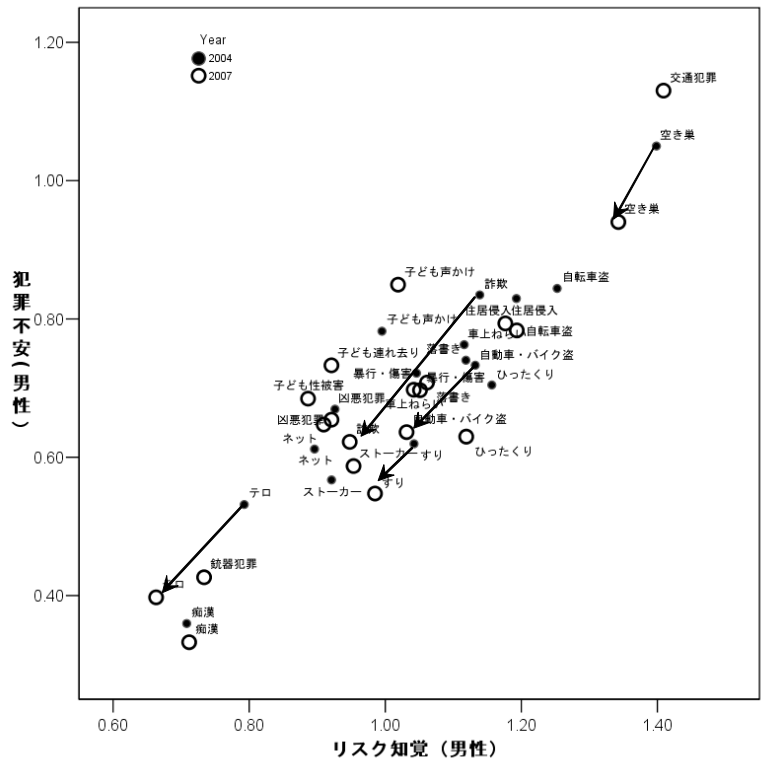
リスク研究では、リスクは主観的確率（その事象が起きる確率の主観的な見積もり）と結果の重大性（事象が起きた場合にどのくらい重大な結果が生じるか）との積だと定義されることが多い。本研究でたずねているリスク知覚は主観的確率に相当する。今回の交通犯罪・銃器犯罪の違いにあてはめると、交通犯罪は主観的確率が高く、銃器犯罪は主観的確率が低く、その主観的確率の差異が犯罪不安の程度に影響していると解釈できる。一方、子どもの被害は、主観的確率よりは結果の重大性が犯罪不安に影響していると考えられる。

図Ⅲ－1－5は、前回調査と今回調査におけるリスク知覚と犯罪不安との関係を散布図で示している。前回調査の布置は黒丸で、今回調査の布置は白丸で示している。空き巣、詐欺、テロといった犯罪は左下方向に移動している。すなわち、リスク知覚、被害不安の両方が減少していることを意味している。統計的には有意ではなかったが、子どもへの声かけは男性で右上方向、女性で左上方向に移動している。

図Ⅲ-1-4 リスク知覚と被害不安との関係



図Ⅲ-1-5 リスク知覚と被害不安との関係
(前回調査から今回調査への変化)



(2) 年齢層別・性別による被害不安、リスク認知の差異

図Ⅲ－１－６は性別、年齢層別の被害不安、リスク知覚各得点の平均を示している。横軸が年齢、縦軸が各得点を示している。破線が男性、実線は女性の変化を示している。

性別については被害不安、リスク知覚ともに、一方、年齢層による違いは、被害不安、リスク知覚ともに30歳～40歳代で高く、20歳代や50歳代以上では低い非線形の傾向がみられた。

まず、被害不安では若年齢層で女性は男性よりも得点が高い傾向がみられた。年齢による変化をみると、20歳代では低かったのが30歳代、40歳代で上昇し、50歳以降で減少するという傾向がみられた。性別による差は年齢によって異なっているようだった。40歳代まででは女性は男性よりも4点程度高かったが、50歳代になると男女差は急に消失し、70歳代に至るまで男女による違いは見られなかった。

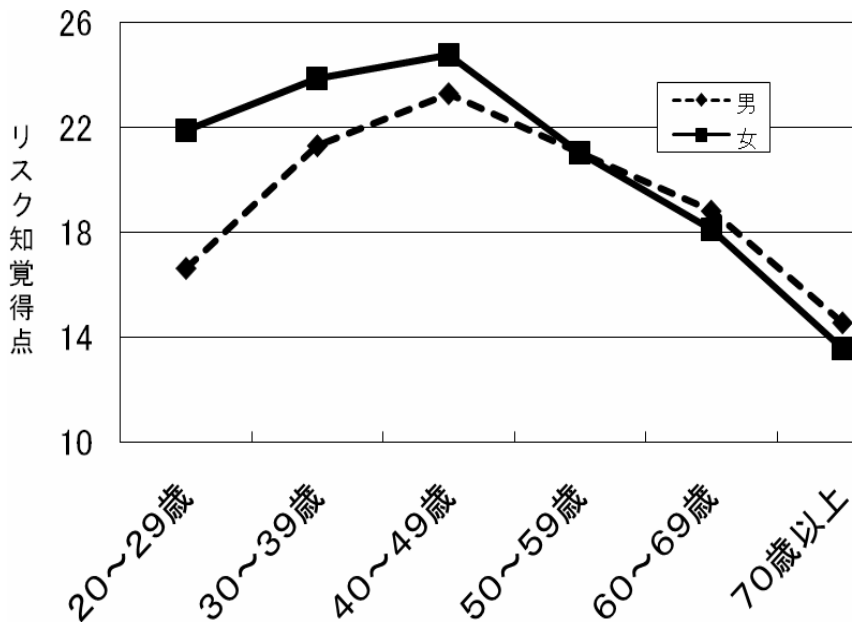
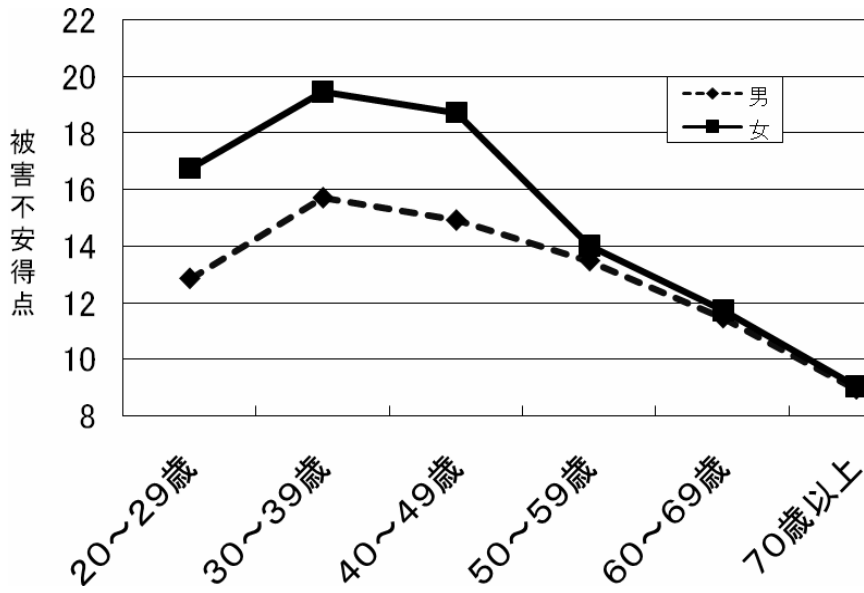
この傾向を統計的に検証するため、被害不安得点を従属変数に、性別（男性、女性の2水準）、年齢層別（20歳代～70歳代の7水準）を独立変数と設定した2要因の分散分析を行ったところ、性の主効果（ $F(1,1759)=18.8, p<0.01$ ）、年齢層の主効果（ $F(5,1759)=28.1, p<0.01$ ）、性・年齢層の交互作用効果（ $F(5,1759)=3.05, p<0.01$ ）がみられた。この結果は、被害不安は性別、年齢層によりそれぞれ異なっており、かつ、男性か女性かで年齢による変化のパターンが異なっていることを意味しており、上の解釈が統計的にも裏付けられたことになる。

リスク知覚についても、女性は男性よりも得点が高く、年齢層別では40歳代が最も得点が高いという傾向が見られた。男女差は20歳代で最も顕著に表れ、以降、30歳代、40歳代ではだんだん縮小していた。50歳代以上では男女差はほとんどみられなかった。

分散分析で統計的な検定を行ったところ、性の主効果は5%水準で有意（ $F(1,1770)=4.96, p<0.05$ ）、年齢層の主効果は1%水準で有意（ $F(5,1770)=22.1, p<0.01$ ）、性・年齢層の交互作用効果は非有意（ $F(5,1759)=3.3, p=0.06$ ）だった。

つまり、女性よりも男性よりも、中年層はそれ以外の年齢層よりも犯罪被害リスクを知覚しているが、男女差の程度は年齢とは関係していないといえる。また、男女差は統計的には有意だったが、その差は被害不安ほど顕著ではなかった。確率推定であるリスク認知は男女によって差が生じにくい、被害不安は被害にあった場合の対処可能性などが影響していると考えられる。

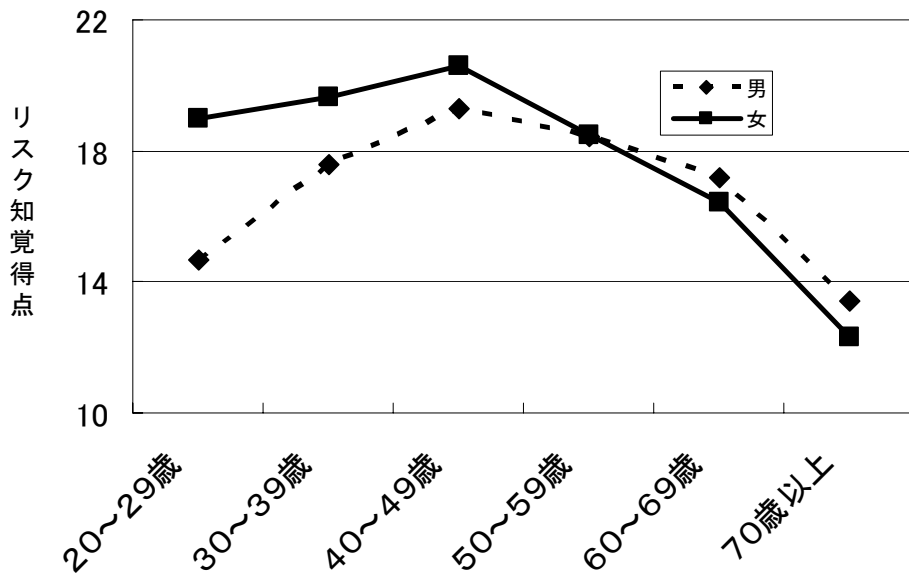
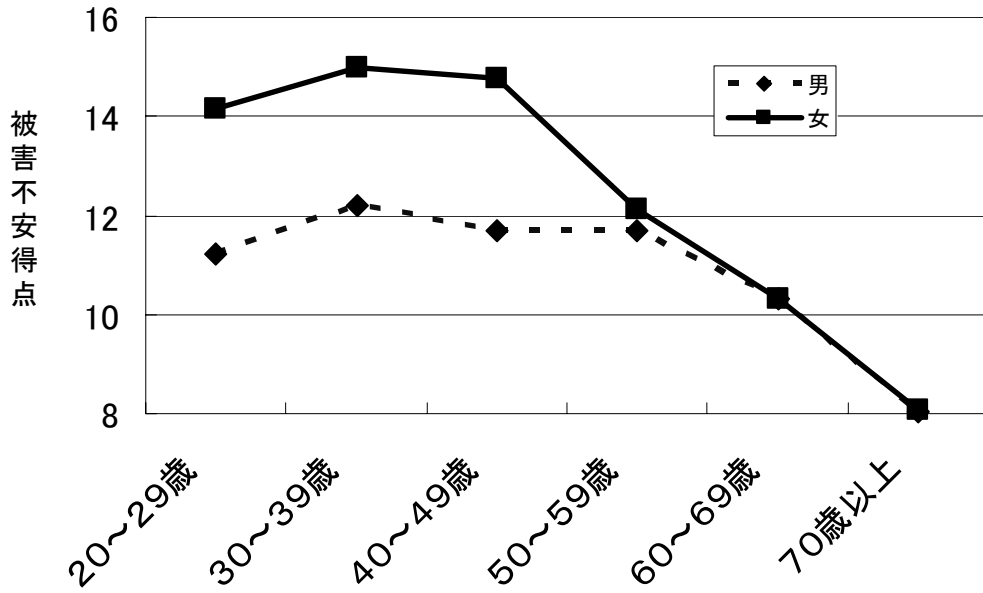
図Ⅲ-1-6 年齢層別、性別の被害不安とリスク知覚の平均値
(全項目)



以上をまとめると、被害不安、リスク知覚ともに女性は男性よりも程度が大きい。また、年齢層別にみると20歳代で低かったのが30～40歳代で高くなり、また60～70歳代で減少していく。男女差は被害不安の方がリスク知覚よりも顕著だといえる。また、興味深い結果としては、男性の40歳代、50歳代はリスク知覚の程度は大きいですが、犯罪不安の程度は必ずしも大きくないこと挙げられる。一方、同世代の女性はリスク知覚が高まると同時に被害不安が高まっていた。

なお、本調査で被害不安、リスク知覚を尋ねた被害種類には、「l) 子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする」、「m) 子どもが連れ去られる」、「n) 子どもが性的な被害にあう」の3種類が含まれている。この3項目以外では被害対象が回答者本人と家族の両方であるのに対し、この3項目では被害対象は回答者本人ではなく、同居家族のみとなる。回答者の年齢層と同居家族内の子どもの有無との間には当然関連があると思われ、単純な性・年齢別の比較に意味がなくなる可能性がある。このため、この3種類を除いた被害不安、リスク知覚の合計点を算出し、性別・年齢別に図Ⅲ-1-7に示した。結果に大きな相違は見られなかったため、被害不安やリスク知覚に対する性・年齢の効果は一貫しているものと考えられる。

図Ⅲ-1-7 年齢層別、性別の被害不安とリスク知覚の平均値
 (子どもの被害3項目を除く)



(3)被害経験がリスク知覚、被害不安に与える影響

先行研究の多くで、過去の犯罪被害経験によりリスク知覚が高まり、被害不安が喚起されることが示されている (Ferraro, K.F.(1995)など)。

本研究でも問1で16種類の犯罪について過去1年間の被害経験を尋ねている。これらの1回でも被害を報告した回答者を「被害あり群」、被害報告がなかった群を「被害なし群」とした。被害不安得点、リスク知覚得点が欠損値となった回答者を除いた結果、被害あり群が414名(うち男性200名、女性214名)、被害なし群が1,365名(うち男性676名、女性689名)となった。

図Ⅲ-1-8には、被害あり群となし群の被害不安得点、リスク知覚得点の平均値を男女別に示している。

まず男性の被害不安得点は、被害あり群が16.0(標準偏差10.2)、被害なし群が12.4(標準偏差9.3)と、被害あり群がなし群よりも高かった。また、女性の被害不安得点も被害あり群が17.8(標準偏差10.2)、被害なし群が14.5(標準偏差10.1)であり、被害あり群がなし群よりも高かった。

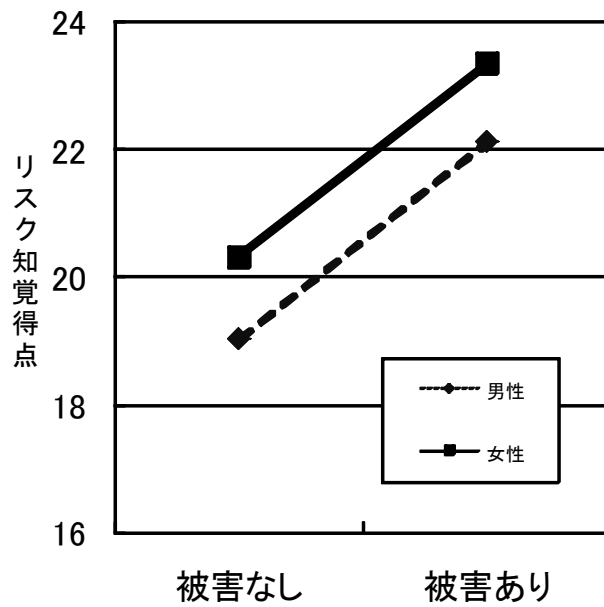
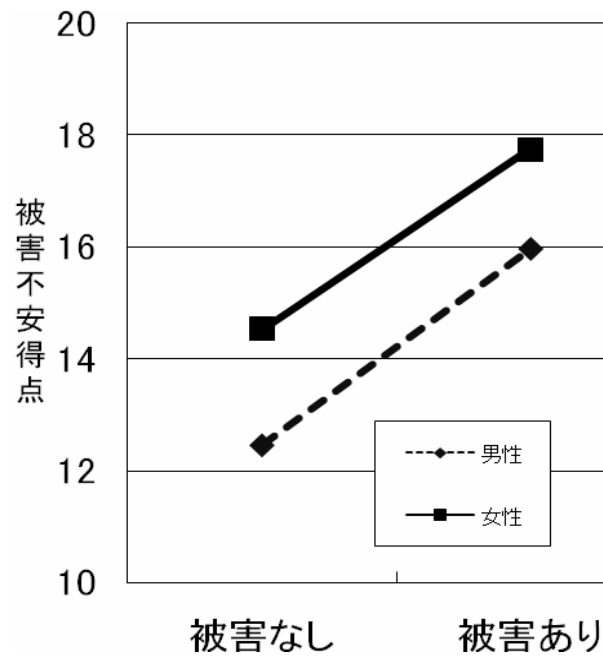
被害不安得点を従属変数に、被害の有無、性別を独立変数にとった2要因の分散分析の結果、被害の有無の主効果($F(1,1762)=37.4, p<0.01$)、性別の主効果($F(1,1762)=12.1, p<0.01$)は、ともに1%水準であり、交互作用は非有意だった($F(1,1762)=7.0, p=.79$)。すなわち、男女の性別を問わず、被害あり群はなし群よりも被害不安の程度が大きいことが示された。

次にリスク知覚では、男性では被害あり群が22.1(標準偏差11.6)、なし群が19.0(標準偏差12.5)と、被害あり群はなし群よりも得点が高かった。女性でも被害あり群が23.3(標準偏差10.5)、なし群が20.3(標準偏差11.4)と、被害あり群がなし群よりも得点が高かった。

リスク知覚得点を従属変数に、被害の有無、性別を独立変数にとった2要因の分散分析の結果、被害の有無の主効果は1%水準で有意($F(1,1762)=22.4, p<0.01$)、性別の主効果は5%水準で有意($F(1,1762)=22.9, p<0.05$)であり、交互作用は非有意だった($F(1,1762)=.395, p=.96$)。すなわち、男女の性別を問わず、被害あり群はなし群よりもリスク知覚の程度が大きいことが示された。

これまでの犯罪不安研究では、直接的な被害経験や、間接的な被害見聞が、個人のリスク知覚を媒介して犯罪不安につながるというモデルが示されている。本調査での結果もこのモデルを支持するものといえよう。

図Ⅲ-1-8 犯罪被害が被害不安、リスク知覚に与える影響



4. まとめ

本章では、本調査の主要部分である被害不安、リスク知覚項目について、3年前の前回調査結果と比較し、被害経験が被害不安、リスク知覚に与える影響などの分析結果を述べた。具体的に扱った項目は、自分自身の犯罪被害不安を感じる頻度（問3）、同居家族の犯罪被害不安を感じる頻度（問4）、罪種別の被害不安（問6）、罪種別のリスク知覚（問7）である。

自分自身の犯罪被害不安を感じる頻度は、「よくある」が3.0%、「たまにある」が42.1%で、前回調査の「よくある」の6.3%、「たまにある」の47.3%よりも有意に減少していた。同居家族の犯罪被害不安を感じる頻度は、「よくある」が6.0%、「たまにある」が55.2%で、前回調査の「よくある」の9.7%、「たまにある」の55.2%よりも有意に減少していた。

罪種別の被害不安を得点化したところ、上位3つは交通犯罪、住宅対象侵入盗、子どもへの声かけ・追いかかけであり、下位3つはテロ、銃器犯罪、痴漢だった。罪種別のリスク知覚の上位3つは交通犯罪、住宅対象侵入盗、無断侵入であり、下位3つはテロ、銃器犯罪、痴漢だった。前回調査と比較すると、住宅対象侵入盗、詐欺、テロの3種類は被害不安、リスク知覚ともに大きく減少していたが、子どもへの声かけの被害不安は増大していた。

性別にみると、女性は男性よりも被害不安、リスク知覚の程度が大きかった。年齢別にみると、被害不安、リスク知覚ともに20歳代は低いが、30～40歳代にかけて高まってピークを迎え、その後50～70歳代にかけて大きく減少する、という非線形な関係が見られた。

過去1年に被害経験がある回答者は、被害がない回答者よりも有意に被害不安、リスク知覚の程度が大きかった。外国での研究で示されている、過去の犯罪被害経験によりリスク知覚が高まり、被害不安が喚起されることが今回の調査結果でも示された。

【文献】

Ferraro, K.F. (1995) *Fear of Crime Interpreting Victimization Risk*, State University of New York Press, New York.

Warr, M. (2000) *Fear of Crime in the United States: Avenues for Research & Policy*, In Duffee (Eds) *Measurement and Analysis of Crime and Justice*, Criminal Justice 2000, 4, 451-489